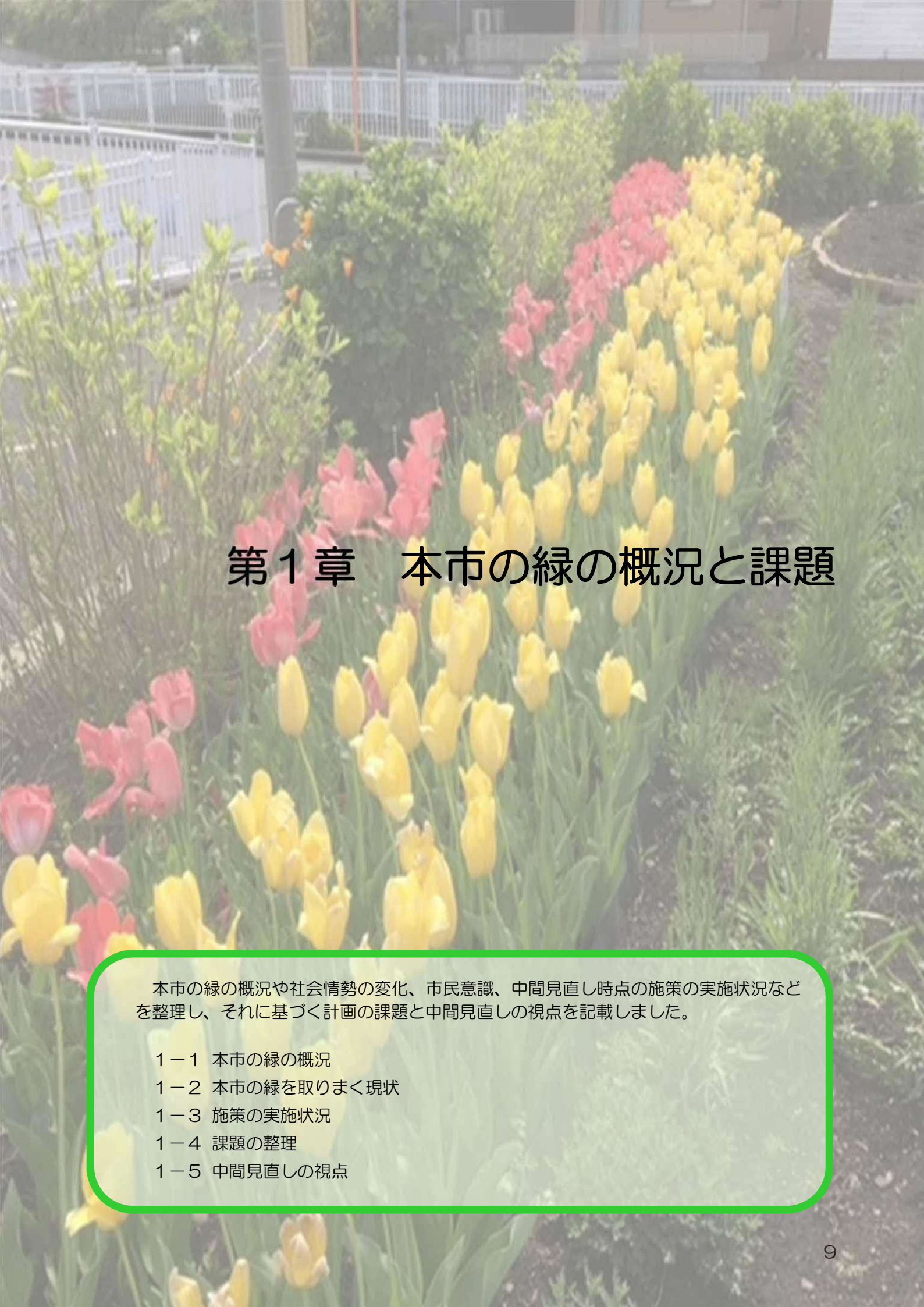


第１章　本市の緑の概況と課題

本市の緑の概況や社会情勢の変化、市民意識、中間見直し時点の施策の実施状況などを整理し、それに基づく計画の課題と中間見直しの視点を記載しました。

１－１　本市の緑の概況
１－２　本市の緑を取りまく現状
１－３　施策の実施状況
１－４　課題の整理
１－５　中間見直しの視点

１－１　本市の緑の概況

１.本市の地形と土地利用

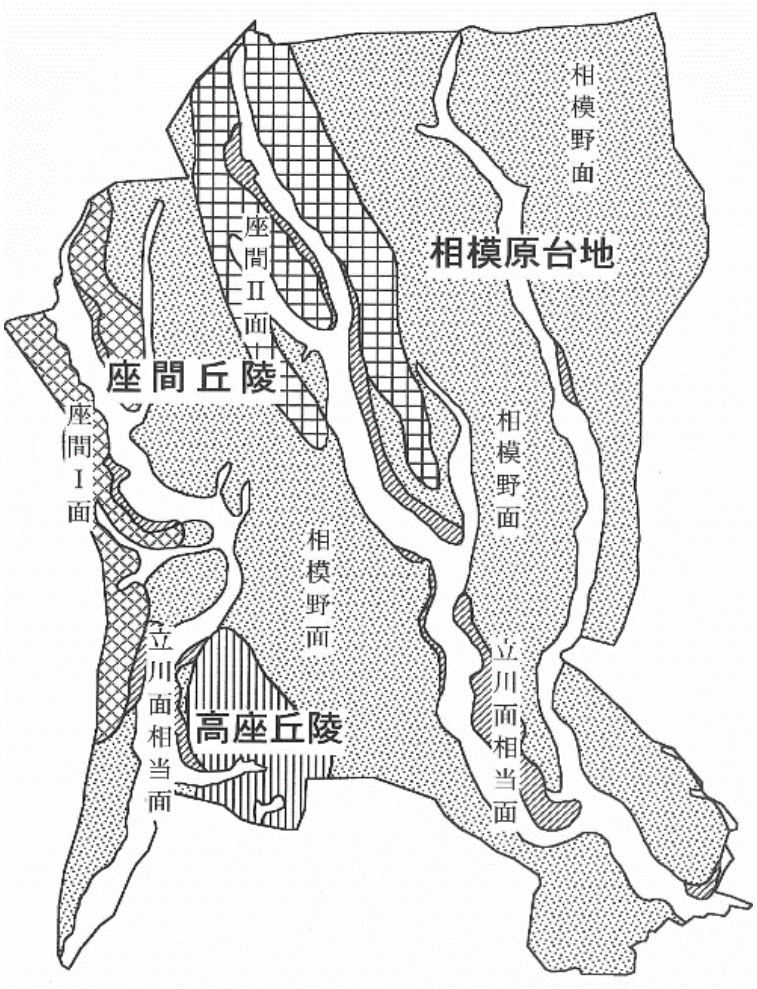
（１）地形

本市の地形は、主に３つの河川（目久尻川、比留川、蓼川）沿いの河岸丘陵と中央部の平地部からなりたっています。

河岸丘陵には、良好な斜面緑地が分布、中央部の平地部には農地が広がっています。

（２）土地利用

- 土地利用の状況をみると、最も割合が多い区分が住宅で、平成27年時点で市域の約2割に相当する481.9haを占めています。
- 住宅面積は平成7年の429.8ha（市域の19.3%）から平成27年の481.9ha（市域の21.6%）まで増加しているのに対して、田や畑などの農地や、山林の面積は減少してきています。

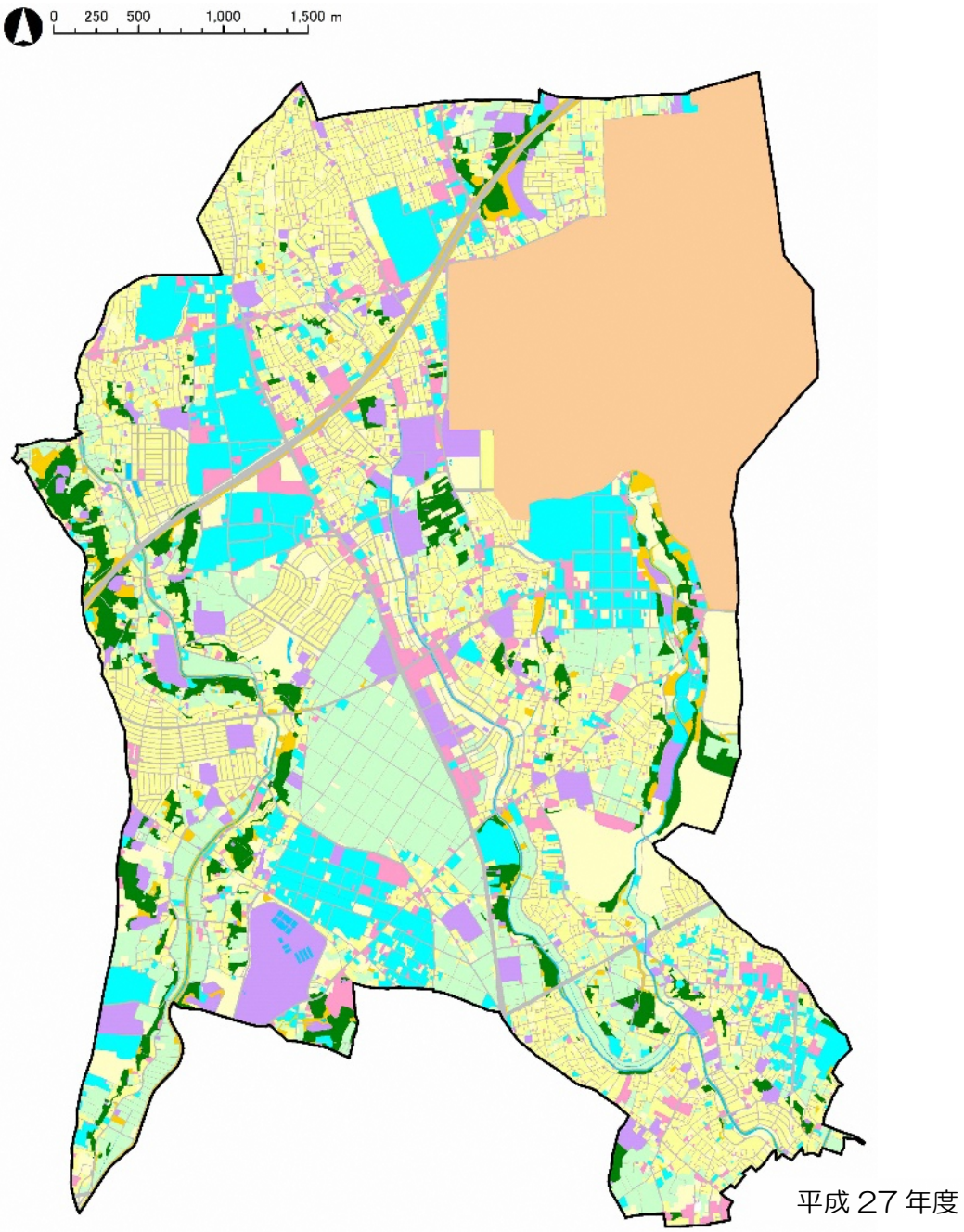


【凡例】

- 相模野面　：比較的新しい相模野礫層と、それを覆う武蔵野ローム層により構成される。
- 座間Ⅰ面　：約 25 万年前に形成された座間丘陵礫層と、層の薄い下部多摩ローム層により構成される。
- 座間Ⅱ面　：礫層、泥層、砂層の順に堆積する土屋層と上部多摩ローム層により構成される。
- 立川面相当面：河川沿いに平坦地を形成する地形面。
- 高座丘陵　：13～12 万年前に形成され、下末吉層とそれを覆う下末吉ローム層により構成される。

出典：「綾瀬市史８（上）別編 自然」（綾瀬市）

図１－１　綾瀬市の地形



出典：「都市計画基礎調査」（神奈川県）

図１－２　綾瀬市の土地利用（上図：土地利用（平成27年度）、下図：土地利用の推移）

（参考）市内の開発の経緯

市の中心部や北部・西部において、もともと農地だった土地が、昭和中期以降、住宅地として整備が進められてきました。一方で、市の中心部や住宅地の周辺においても、まとまった樹林地の緑や農地などのオープンスペースが残されています。

市中心部（深谷周辺）

昭和中期（昭和 36～44 年）

昭和～平成（昭和 63 年～平成 2 年）

現在（平成 31 年）

住宅地（綾西周辺）

昭和中期（昭和 36～44 年）

昭和～平成（昭和 63 年～平成 2 年）

現在（平成 31 年）

工業地帯（吉岡周辺）

昭和中期（昭和 36～44 年）

昭和～平成（昭和 63 年～平成 2 年）

現在（平成 31 年）

出典：「地理院タイル」（国土地理院）